

「わたしはお母さんの娘でお母さんはわたしの娘」

秦雅心（はたみやび）

【あらすじ】

高校 2 年生の響は、突然、母・佐枝子を亡くす。最後に一緒に過ごした朝に母に悪態をついてしまった響は、それまでも優しく接してこなかったことを強く悔やむ。その夜、響は偶然「人生の本」と書かれた本屋さんに足を踏み入れ、店主のおじいさんに頼まれ、本の整頓を手伝う。その本屋は、その町皆の「人生のシナリオ」を収納している場所である。一週間、自分の人生のシナリオを一時停止し、過去に振り返り母に会える時間を与えられる。しかし、その間は他人の身体として過ごさなければならず、正体を明かしてはならず、自分分は魂でしかないため未来を変えられない等の注意点を言い渡される。

佐枝子の母・千紗の姿で 10 年前に戻った響は、佐枝子や過去の自分の自分と日々を過ごし、今まで知らなかった母の想いを次第に見し、ていく。ある日、千紗（＝響）は、中学生・空に出会い、空も同じく未来から来ていると勘づく。空の正体は、自殺した息子・直樹に会うため、息子の初恋の相手・空の身体を借りた敦である。一方で、佐枝子のかつての夢がダンス教室の体験授業に佐枝子を連れていく。憧れのドレスを身に纏った自分を見た佐枝子は、強く心を動かされる。佐枝子は千紗（＝響）とペアで踊り、ダンスを心から楽しむ。響は、「母の愛」と「娘の愛」の形を次第に掴み始めていく。

そんな中、空（＝敦）との会話の中で、千紗（＝響）は、敦の息子の直樹は、自分の唯一の心を開ける相手である担任の先生と同一人物であること、そして、直樹が自殺した時間、自分も過去に戻った夜の数時間後だと知る。千紗（＝響）は直樹を社交ダンス教室に招く。そこで直樹は佐枝子と出会う。直樹が現れる。直樹の心の内を耳にした敦は深く反

省し、直樹を抱擁する……。

現在に戻った響は、佐枝子は亡くなつたままだと悟る。響は直樹が自殺する場所へ急いで向かうが、そこで目にしたのは散歩してゐる直樹と空である。佐枝子との会話が契機となり、過去の直樹と敦の行動が変わり、直樹の未来が変わつたのである。響は、この一週間の記憶と想いを胸に、新しい一步を踏み出していく。

【登場人物表】

早川 響（7・17・19）	高校二年生
早川 佐枝子（35・45）	響の母
藤田 直樹（13・23・25）	響の担任の先生
水上 空（13・23・25）	直樹のクラスメイト、初恋の相手
藤田 敦（45・55・57）	直樹の父
早川 千紗（65）	佐枝子の母、響の祖母
本屋のおじいさん	
水上 晴美（66・78）	空の祖母、千紗の友人
美和 靖子（30・40）	社交ダンス教室の先生
響の父	
タクト（24・26）	響の好きなアイドル
犬を散歩するおばあさん	
ブリキの木こり役の子	
受付嬢	
男の子	
男の子の母	
男の子の父	

○公園・タ
10歳の少女、ブランコに座っ
ている。クッキー缶からクッキーを
次々と取り出し、口に詰め込む。
少女のN「もうすぐで卒業だから、クラスの
みんなに配ってねと、地味な手作りクッキー
Iを母からたくさんもらった。ランドセル
の奥にしまい、放課後、公園で一人で全部
食べた。お腹がいっぱいで、苦しかった。
この日からだろうか。私は母と、自分へ、
いつも苛立ちを覚えるようになった」

【4月13日】

○マンションの一室・早川家・リビング
テレビで朝のニュース番組が流れてい
る。

「老人ホームで中学生たちが社交ダン
スを披露」との見出しで、中学生たち
が社交ダンスを踊っている映像。
早川佐枝子（45）、テレビを見なが
らお皿を洗っている。
その横で制服姿の早川響（17）が洗
い終わったお皿を拭いている。
佐枝子「ねえ、響、今日帰ってきたらさ、
久々に一緒に映画見ようよ」

響「映画？」

佐枝子「お母さん一番好きな映画があつてね、
ダンスの映画なんだけど」

響「ごめん、今日は放課後寄るところあるの」

佐枝子「そっか、お友達と？」

響「：いないって言ったじゃん」

佐枝子「：（響の表情をちらっと伺って）
大丈夫よ。新しいクラスまだ一週間だし

よ？」

響「いいの、ずっとこのままで。高校は省エ
ネモードで過ごしてるから」

佐枝子「省エネ？」

響「うん、余計なものにエネルギー使いたく
ないの。最後卒業できたらいいでしょ」

佐枝子「まあ、そうね」

響「あ、お母さん」
佐枝子「ん？」
響「今日の 13 時から 15 時に荷物届くから、家にいてね」
佐枝子「何の荷物？」
響「タクトのライブの DVD、誕生日記念の」
佐枝子「へえ、DVD って、高かったでしょ？」
お金まだ足りてる？」
響「余ってるよバイト代。そんなに子ども扱
いしないですよ」
佐枝子「（微笑んで）分かったよ、響は小さい頃からしっかりしてたもんね」
響「：」
佐枝子「響がまだ小学生の時だったかな、お
ばあちゃんに亡くなっちゃった日、私が泣
いてたら、響がお母さんのお母さんになっ
てあげるって、慰めてくれてね」
響「（ため息）前にも聞いたよ、その話」
佐枝子「：」
響「：行かなきゃ」
とかばんを持って足早に玄関へ向かう。
佐枝子「濡れた手を拭いて、響の後を追って、」
佐枝子「いってらっしゃい」
パターンと、扉が閉まる。
○マンションの廊下
響「閉まった扉の前で立ち止まる。振り返って、また歩き出す。」
○歩道
犬を散歩しているおばあさん、響の前
から歩いてくる。
響「おばあさんと目が合うが、すぐに
目をそらし、道の反対側へ移動する。」
【4 月 14 日】
○マンションの廊下・朝
強い雨。風に吹かれ廊下に大きな雨粒

が入ってくる。

○同・響の部屋

カーテンが閉め切られている。

響、無気力な足取りで、机に近づく。

小さい段ボールが置いてある。

響のN「時間指定：4月13日13時〜15時」と書かれたシールが貼られている。

受け取った直後に、キッチンで倒れて、私が帰ってきた頃にはもう、息がなかった。

響のN「段ボールを開け、中からDVDケースとはがきサイズの写真を取り出す。」

響のN「確かに、高かった。」

響のN「写真の中でアイドルのタクト（24）が、笑顔で響を見つめている。」

トは何を買ったんだろう。母への誕生日プレゼント

い出せなかった。いつも愛を与えてくれた母より、私は赤の他人へいつも多くを与えていた。」

○同・キッチン

響、キッチンに向かって歩く。

母のスリッパが床に落ちている。

響、冷蔵庫を開ける。

小さいタッパーがたくさん入っている。

「響のお弁当用」、「夕飯用」などの付箋が貼られている。

○同・ダイニングルーム

響、タッパに入ったお惣菜を黙々と食べている。

咀嚼音しか聞こえない静かな部屋。

キッチンのカウンターに、小さな骨壺が置かれている。

【4月15日】

○早川家の扉の前
黒いスーツを着た青年、扉の前で立ち

止まる。右目の下にほくろがある。
藤田直樹（23）である。
ユリの花束を抱え、インターホンを鳴らす。

○同・早川家・玄関

響「扉を開け、驚いた表情。」

響「先生」

直樹「今日、『よいこ』の日だね」と、優しい笑顔を浮かべて。」

○河川敷

響と直樹、雑草が生えた斜面に横並びで座っている。
直樹、かばんからビニール包装に包まれた草餅を二つ取り出し、響に一個渡す。

響「直樹を見てから、受け取って。」

直樹「いつもこれなんだ。ここに來るときの

お供」

響「和菓子好きだったんですか」

直樹「毎月、母から一箱送られてくるんだ。」

理由は知らないけど」

響「へえ」

と、草餅のビニール包装を開け、一口食べる。

直樹「どう？」

響「草の味」

直樹「（微笑んで）だから相性いいんだよ。」

この川と、雑草の匂いと」

と、草餅を食べる。

響「静かに川を眺めている。」

直樹「遠くに見える高架橋を指さす。」

直樹「夜はね、その橋から見るとすごく綺麗で。全然人通らなくてさ、気に入って秘密にしていたけど、早川にだけ教えてあげるよ」

響「（高架橋を眺めながら）どうも」

直樹の傍に置かれているスマホの画面が光る。ロック画面に、タクトの写真。

響「あっ、それ」
直樹「気付いた？この前のブログの」
響「ビジュいいですよね」
と、笑顔を見せて。
直樹「（笑顔になって）ね」
響、川を眺めながら、草餅を頬張る。
直樹「：学校に戻るのは、ゆっくりでいいからね」
響「でも先生、昼休みまたぼっちになるでしょ」
直樹「（苦笑して）いいよ、慣れてるから」
響「先生も、一人暮らしでしたっけ」
直樹「：いや、父と、実家で」
響「：」
直樹「でももうすぐ、引っ越したいと思って」
響「大人への一歩ですね」
直樹「（笑って）そうだな」
響「：」
直樹「新居見せるよ。いろいろと落ち着いたら」
響「えー教え子誘うの？一人暮らし？」
直樹「：いや」
と、照れた表情。
響、直樹の表情から察して、
響「ふーん、そうか、電池不足なアンドロイドって有名な、藤田先生を射止めたのか」
と、草餅を食べる。
直樹、顔が赤くなり、
直樹「俺そんなこと言われてたの：」
響「でも、会ってみたいな、その人に」
直樹「うん、近いうち会わせるよ」
と、微笑んで。
微風に吹かれながら、黙々と草餅を食べる二人。

○早川家・響の部屋・夜

ベッドの中でスマホを見ている響。
響、電話アプリの画面を見つめたまま
深呼吸して、通話ボタンを押す。
ちょうど三回の呼び出し音で繋がる。

○ 藤田家・夜

玄関の扉が開く。

藤田敦（55）、玄関に入る。

電気がついていない真っ暗な部屋。

敦「ただいま」

敦、手にビニール袋を提げている。

○ 同・キッチン

敦、ビニール袋から紙の箱を取り出し、キッチンボードの上にそっと置く。

箱をゆっくり開け、中にホルケーキ

が見える。「Happy Birthday」と書かれた

敦「（独り言）よし、大丈夫」

と、箱をゆっくり閉め、底を持って、

慎重に冷蔵庫の中に移動する。

○ 同・直樹の部屋

敦、直樹の部屋の扉を開ける。

敦「直樹、明日」

部屋の誰にもいない。

ベッドの上にスマホが置いてある。

敦、スマホを拾い上げ、表情が曇る。

○ 早川家・リビング・夜

響、扉を開け、リビングに出る。

目と顔が浮腫んでいる。

誰もいない、静かなリビング。

響、真っ黒なテレビの画面をしばらく

見つめる。

響、キッチンのカウンターに置かれた

骨壺を見て、

響「…映画、見よっか」

○ TSUTAYAの店舗外

響、店の外に立っている。

真っ暗な店内。扉には「本日の営業は

終了しました」との紙が貼られている。

○ 歩道

両側のお店が全て閉まっており、暗い街頭。重い足取りで歩いている響、街角を曲がる。道路の向かい側に、灯りのついているお店がポツンと一軒見える。お店がポツンと一本の看板が光っている。響、立ち止まる。

○ 「人生の一本」の扉の前

響、店内の様子を伺いながらお店に入る。暖色系の明かりが店内を朦朧と照らしている。古い本がぎっしり詰まった本棚が奥まで並んでいる。床は、本が少し入った段ボールと、散乱している本で埋め尽くされ、足の踏み場がほとんどない。店内は入り口からは想像できないほど広く、奥行きが深い。

響 「本屋さんか……」

？ 「ヘクション！」

と、大音量の、かすれた声のくしゃみ。響、飛び上がった、振り返る。店の隅で、作業机の後ろに座っている年配のおじいさんが響を見ている。老眼鏡をかけており、髪が真っ白で、小柄でやせ細っている。おじいさん「ああ：びっくりさせてごめんな、ちよっと、埃アレルギーでな」

響 「：いいえ」

おじいさん「なにか探しているのか？」

響 「あ、いえ、ちよっと、入るお店間違えちゃって、全然、気にしないでください」

おじいさん「目を瞑っており、座ったまま寝ている。」

響 「え……」

おじいさん「へすぐに目を覚まして」あ、あ
 あ、ごめんね。だめだな、二日寝ないと
 もうやっていけない年になったな」
 響「：大丈夫ですか？」
 おじいさん「ははは、大丈夫だ。それにして
 も、もつと綺麗な時に来てほしかったな」
 と、苦笑して、腰に手を当てながら立
 ち上がった。
 響、店内を見回して。
 本のカバーの色が青、赤、黒、白、茶
 色などカラフルで、大きさと厚さも
 様々である。
 どの本も題名はなく、本の表紙に書か
 れているのは全て数字の羅列である。
 響、近くに落ちている本を一冊拾い上
 げ、題名を見る。
 「1996115」と書かれている。
 響「：」
 おじいさん「もうすぐお店畳むから、片付け
 ててな」
 響「いつ、畳むんですか」
 おじいさん「明後日や」
 響「明後日：？終わりますか？」
 おじいさん「さあどうかな」
 と、店内を見回す。
 響も、店内を見回して。
 おじいさん、響を見つめる。
 響、目線を感じて、おじいさんと目が
 合う。
 × × ×
 ぎっしり本が入った段ボールを、入り
 口近くに積み上げる響。額に汗が浮か
 び、息が少し切れている。
 おじいさん「嬉しいな、ずいぶんと綺麗にな
 った」
 入り口近くと、一列目の本棚の近くに
 散乱していた本がなくなり、開放感が
 増した店内。
 響、息をゆっくり整えながら、奥まで
 続く本棚の列をぼんやりと眺めながら、

響「… ため息をついて、
なにしてるんだろ」

おじいさん「お嬢ちゃん、会いたい人、いる
か？」

響「えっ」

と、おじいさんを見て、
おじいさん「すぐ会いたい、と思ってる人、
心の中にいるでしょ」

響、目が潤う。
おじいさん、優しい表情で響を見つめ
て、

おじいさん「会ってきな、お母さんに」

○店の隅の作業机

机を挟み、向かい合って座っているお
じいさんと響。

おじいさん、引き出しの中から何かを
探している。

おじいさん「（独り言）あったあった」

と、何冊かの本を机の上に置いて。

響、おじいさんを不思議そうに見つめ
ている。

おじいさん「このお店の名前、見たか？」

響「え… 人生の、一本？」

おじいさん「（目を見張って）違う違う」
と、笑って。

○店の外

「人生の“一本”の看板。

看板に張り付いた木の葉っぱ、風に飛
ばされる。

「一」がなくなり、「人生の本」との
文字。

○店の隅の作業机

机を挟み、向かい合って座っているお
じいさんと響。

おじいさん「ここに、この町の皆の、一人一
人の人生のシナリオが保管されてるんだ」

響「人生のシナリオ：」
 おじいさん「手伝ったくれたお礼に」
 と、一冊の本を机の上に置く。
 「20080324」と書かれた、群
 青色の表紙の本。
 響「私の、誕生日」
 おじいさん「ああ」
 と、微笑んで。
 響、本を受け取ろうとする。
 おじいさん「慌てて本を引いて、
 だ」
 おじいさん「あなたが読むことはできないん
 だ」
 響「え？」
 おじいさん「申し訳ないね。私以外は、誰
 一人、この本を読むことはできないんだ」
 響「？」
 おじいさん「あ、あと、実はしおりを入れる
 ことも、できるんだ」
 響「しおり？」
 おじいさん「本を開き、ページをばら
 ぱらとめくる。
 おじいさん「あ、ここだ」
 と、薄い白色のしおりを入れる。
 響「何が起きるんですか？」
 おじいさん「時間を止められるんだ。これで
 ね、今あなたの人生は一時停止した状態だ
 ね」
 響「話についていけない様子。
 おじいさん「つまり、あなたは今、あなたの
 人生のシナリオ上を進んでいない状態なん
 だ。だから、今なら、過去に戻ることがで
 きるんだ」
 響「過去？」
 おじいさん「ああ、一週間しかないけどな。
 このしおりは一週間しかたないんだ」
 響「？」
 おじいさん「ああ。でも、注意点が二つある
 んだ」
 響「？」
 おじいさん「？」
 注意点？
 一つ目はね、その一週間は、自

分以外の、誰かの身体でしか、生きられないこと」

響「：」

おじいさん「二つ目はね：」

○店の外

明かりのついている店内。

窓際の机で、向かい合って座っている

おじいさんと響の横顔。

響、表情が曇る。

○店内・作業机前

響「戻らせてください。一週間」

と、おじいさんを真っ直ぐ見つめて。

おじいさん「じゃあ、いまから目を閉じて、

今までの人生を、ゆっくり、思い出してね。

この人の身体で、お母さんに会いに行くと

決めたら、強く念じるんだよ」

響、目を閉じる。

(回想)

○公園・夕

ブランコに乗っている響(5)。

佐枝子(33)、響の背中を優しく押している。

○レストランの入り口の前・夜

タクシーに乗り込む響の父の後ろ姿。

佐枝子(34)、響(6)の手を握り、タクシーと反対方向に歩いていく。

○病院・霊安室の待合室

霊安室から出てくる佐枝子(35)。

顔色が悪く、目が腫れている。

長椅子に静かに座っている響(7)。

佐枝子、無気力に微笑み、響の横に座

って、

佐枝子「：待たせたね。ごめんね」

響「お母さん、佐枝子の顔を覗き込んで、
佐枝子「両手で顔を覆って」：お母さん、
もう、お母さんいないの」

響「：」

佐枝子「涙が零れて、

「ごめんね：こんなお母さんの姿、見
せなくなかった：」

響、椅子から降り、佐枝子を抱きしめ
る。

響「お母さん、泣かないで。おばあちゃんの

代わりに、響がお母さんのお世話するよ。

お母さんとご飯食べて、テレビ見て、学校
にいるとき以外、いつも一緒にいるよ」

佐枝子「：うん」

響「響、佐枝子の前髪を小さな手で整えて、
響「響がお母さんのお母さんになってあげる
から、だいじょうぶ」

佐枝子、響を抱きしめ、涙が流れて。

（回想終わって）

○店内・作業机前

目を瞑っている響、まつ毛が濡れてい
る。

おじいさん、凄まじい速さで様々な本
を広げて、ページをぱらぱらとめくつ
ている。

歪み始めていく店内。

螺旋状に空間が曲がり始め、徐々にス
ピードが速くなり、渦巻くようにすべ
ての色彩がお店の奥に吸い込まれ、消
えていく：

○木造の一軒家・早川家・和室・朝

早川千紗（65）、布団の中で寝てい
る。

カーテンのない窓から漏れる光が、
目に当たり、千紗、目を覚ます。

千紗、手で目を擦るが、指輪が目にあ
たる。

千紗「……いたっ」
 と、手を見る。皺と血管が目立つ、日
 千紗「えっ」
 と、起き上がるが、激痛が腰に走る。
 千紗「あああ」
 佐枝子の声「お母さん？起きたの？」
 と、エプロン姿の佐枝子（35）が部
 屋に入ってくる。
 千紗、佐枝子を見つめて。
 佐枝子「腰やっちゃったの？急に起き上がる
 からでしょー」
 と、千紗の肩と腰に手を添えて、寝か
 せる。
 千紗、佐枝子を見つめ、目が潤う。
 佐枝子「千紗を見て」大丈夫お母さん？」
 千紗「あ、大丈夫よ」
 響（7）、パタパタと足音を立てなが
 ら走ってくる。
 響、和室の入り口に立っている。
 佐枝子「響、もう顔洗った？」
 響「洗った！」
 千紗、はっとして、響をぼーっと見つ
 めて。
 響「お母さん、おばあちゃん、早く来てー」
 佐枝子「なあに」
 と、走っていく響を追いかけて、和室
 を出る。
 響のN「幸せ者だなあ、あなたは。幼い顔と
 甘い声で、母を呼ぶ自分を見て、私は少し、
 嫉妬した」
 ○同・ダイニングルーム
 食卓で朝ごはんを食べている千紗と佐
 枝子と響。
 響、納豆を服にこぼしてしまふ。
 佐枝子「へ、すぐに気付いて」あらら」
 と、ティッシュで拭いてあげる。
 佐枝子「パジャマで食べてよかったね」
 響「ドロシーのドレスじゃなくてよかった」

と、はにかんで。

千紗「ドロシー？」

佐枝子「うん、今日午後から学芸会なの。お母さん一緒に行くでしょ？ほら昨日話した」

千紗「あ、ああ、思い出したわ」

響「響、主役なんだよ」

佐枝子「（微笑んで）そうね」

千紗「すごいね」

と、響を見つめる。

響、無邪気な笑顔を浮かべながら佐枝子と話している。

響のN「そっか。この頃の私は、まだ歌手になりたいて夢見てたんだ。夢とか、そんなものない方が楽だなんて、まだ気づいてない頃なんだ」

○同・玄関

ドアの前に立っている響と佐枝子。

響、ランドセルを背負っている。

佐枝子「おばあちゃんに行ってきますは？」

響「行ってきます！」

千紗「行ったらしゃい」

佐枝子と響、手を繋いで歩いていく。楽しそうに話しながら歩いている二人の後ろ姿を、見つめている千紗。

（回想）

○「人生の本」店内

向かい合って座っている響とおじいさん。

おじいさん「二つ目はね、あなたがいらぬ期

待と、失望をしないためなんだ」

響「失望？」

おじいさん「あなたが過去で何かを変えよう

としてみても、お母さんの未来は、変わらない。

死んだ人は、生き返れないんだ。あなたは、

誰かの身体を借りた魂でしかないからね、

普通の人として生活して、人と話すことが

できて、魂であるあなたの意志のものが

行動では、その世界の相手の人生と、未来

へ変化を与えることができない。透明人間
が、相手に触れようとしても、通過してし
まうようにね」
響、表情が曇る。
おじいさん「だから、くれぐれも正体を明か
さずに、余計な期待はせず、一週間、た
だお母さんと過ごしてくるんだ。その心の
準備と、覚悟、できるか？」
響、おじいさんを見つめて、考え込む。

（回想終わって）
○早川家・リビング
千紗、マーカーペンを手に持っている。
周囲を見回し、カレンダーの10月の
ページをめくる。
11月のページで、「お母さんへ。1
7歳の響です」と書く。
書いてすぐに、文字が水に溶けるよう
に消えていく。
千紗、驚いて、ペンを床に落とす。
周囲を見回すが、誰もいない。

○小学校の体育館
ステージにプロジェクターで「学芸会」
との文字が映し出されている。
保護者たちが観客席で談笑している。
千紗、隣に座っている佐枝子を見る。
佐枝子、肌が艶やかで若々しく、唇も
赤く色づいている。
× × ×
ブリキの木こり役の子、カカシ役の子
と響、ステージに立っている。
響、水色のドレスを着ている。
ブリキの木こり役の子「オズは、わたしに心
をくれるでしょうか？」
響「くれるんじゃないかしら。一緒においで
よ」
と、ブリキの木こり役の子と手を繋ぐ。
× × ×
音楽が鳴り、響が真ん中に立ち、手を

繋いで歌う子供たち。
響、笑顔で踊っている。
千紗、隣の佐枝子を見る。
佐枝子、笑顔のまま、涙ぐんでいる。

○ 早川家・洗面台の前・朝

千紗、鏡の前に立っている。
化粧水を顔に塗り、手でパンパンと頬を叩く。

千紗、両手で頬を支えたまま鏡の中の自分を見つめて、

千紗「なんか今日盛れてるな」

と、口角を上げて微笑んで。

千紗、ふと横に人の気配を感じる。

パジャマ姿の響、千紗を見上げている。

千紗、驚いて、飛び上がる。

千紗「！びっくりした！」

響、大きな目で千紗を真っ直ぐ見つめている。

千紗「あ：顔洗う？」

と、笑顔を作り、逃げるように洗面台を離れる。

○ 同・キッチン

佐枝子、目玉焼きを三枚焼いている。
千紗、味噌汁の鍋をかき混ぜている。

○ 同・ダイニングルーム

響、草餅を食べている。

佐枝子「（響に）おいしい？初めてでしょ草餅」

響「草餅って、草でできてるの？」

佐枝子「うん、でもね実は特別な草が使われてて、名前は、たしか：」

○ 早川家の外・道路

ピンク色の軽自動車走ってきて、早川家の前に止まる。

○ 同・ダイニングルーム

千紗「へえ：素敵」
 と、何かを思い出している表情で、味噌汁をかき混ぜている。
 「ピンポン」とインターホンが鳴る。

○同・玄関
 千紗、扉を開ける。
 水上晴美（66）、にこしながら千紗を見つめている。

晴美「千紗ちゃん、行くよ」
 千紗「（困惑して）：どちら様、ですか？」
 晴美「えー、なんてこと言うのよ」
 と、豪快に笑って、千紗の肩を叩いて。

佐枝子「あ、晴美さん！どうぞ中で待っててくださいー」
 千紗「晴美さん？」
 佐枝子「うん、お母さん今日ゲートボールでしよ？ほら毎週土曜」
 千紗「あ、ああ、そうだ、そうだ」
 と、無理にハハと笑う。

晴美、また豪快に笑って。
 一緒に笑う佐枝子。
 千紗、笑顔が引き摺っている。

○ゲートボール場
 談笑しながら、ゲートボールをしている千紗のN「重労働をしておばあさんたち。手が、なげいつも日に焼けていて力強かったのか。この日その理由を、肌で実感した」
 千紗の緊張した面持ちでステイックを振る。
 盛大に空振り。
 「あー」と残念がる声と晴美の豪快な笑い声。
 × × ×
 千紗、へとへとになりながら、日陰に座り、水を飲む。

○ 歩道

千紗「めっちゃ焼けたし、マジキツイ！」
横に男の子が一人座っている。
水上空（13）である。
千紗「一緒にやらないの？」
空「千紗を無視して、スマホを見てい
る。」
千紗「誰かのお孫さん？」
空「フイードのほうに指をさす。
晴美がゴールにボールを入れ、喜んで
いる。」
千紗「晴美さんかー」
空「顔を上げないまま頷いて。
千紗「省エネモードかー、きみも」
と、日焼け止めを顔に塗る。
空「スマホの画面をスクロールする。
千紗「空のスマホ画面を横目でちらっ
と見て。」
「2015 年最新版！アイドルグループ
拳紹介」とのタイトルの記事である。
千紗「手を止めて。」
千紗「へえ、アイドル好きなの？私もよ」
空「急に顔を上げて、
千紗「ほんとにか？！教えてくれない？」
千紗「（空の熱量に驚いて）いいいわ」
と、顔に乗せた日焼け止めを馴染ませ
る。
空「こんなにいっぱいあるって知らなくてさ。
えっと、みんなが好きなグループとか、あ
るのか？」
千紗「えー、いろいろあるな」
空「嵐とかやっぱ好きか？けどいま活動し
てないんだったよな。それくらいは知って
るけど、他のが全然！」
千紗「えっ」
空「え？」
千紗「なんで知ってるの」
空「顔色が変わり、表情がこわばる。」

佐枝子、野菜や食料が詰まったエコバ
ツクを手提げ、信号を待っている。
佐枝子、道路の向かい側の街角にふと
目をやる。
「人生の本」との看板の本屋が見える。
佐枝子、はっとして、驚いた表情。
佐枝子の前で、トラックが通る。
トラックが通り過ぎると、本屋が跡形
もなく消え、自販機が置かれているだ
けである。
佐枝子、自販機をぼーと見つめて、小
さく微笑む。

○そば屋・夕

晴美「はあ、空、千紗、そばをすすっている。
空、片手でスマホを見ている。」

晴美「ちよっと、お化粧室行ってくるわね」
空「うん」

晴美、席を離れる。
空、左右を伺って、

空「藤田敦」

千紗「ん？」

空「俺の、本当の名前だ」

千紗「へえ。それで、何歳なの？」

空「55」

千紗「（驚いて口をふさいで）めっちゃおじ
さん！」

空「（言葉に詰まる）あなたは？」

千紗「17」

空「：そうか」

千紗「じゃあ、あなたも、あの本屋さんに！」

空「ああ」

（回想）
○歩道・夜

敦、ビールの缶を手にも、重い足取りで、
歩いている。
ふと、横から何か多くのものが崩れ落
ちる音が聞こえる。

「人生の本」の看板が光っている。
店内では、本棚が倒れ、その本棚の本
が全て地面に崩れ落ちていいる。
本の下に人の腕が見え、少し動いてい
る。
「ヘクション！」という大きいくしゃ
みと、「うう」と呻き声が聞こえる。
敦、慌てて店内に入る。

（回想終わって）

○そば屋

千紗「心配になるな！」

空「ああ、俺も、助ける気はなかったが！」

千紗「敦さんも、誰かに会いに来たんです
か？」

空「ああ：息子だ」

千紗「息子さん：どうしたんですか？」
空「：自殺したんだ。少し前に：川に、飛び
込んだ！」

千紗「：ごめんなさい」

空「いいんだ。あなたは？」

千紗「：亡くなった母に、会いに来ました」

空「：そうか：大変だったな」

空「：じゃあ、その、この一週間は、どう過
すのか？」

千紗「：毎日、ちゃんと母に優しく接して、
毎日楽しい時間を過ごして、後悔がない、

空「：ちゃんと幸せな一週間を過ごしたいです」

千紗「え？」

空「：いや」

晴美、化粧室から出てくる。

空、スマホを触るふりを始める。

千紗、考え込む。

○早川家・リビング・昼

千紗、リビングに入る。
佐枝子、ハンガーにかけられたままの

千紗「手伝うよ」
 大量な服を抱えて、ソファに置く。
 佐枝子「ありがとう」
 ハンガーから服を取り外し、畳む二人。
 千紗「手が止まる。
 ピンクのハンガーにはピンクのワンピース、
 青いハンガーには青いシャツが
 掛けられている。」
 千紗「これ、ハンガーの色？」
 佐枝子「あ、バレた？いつもね、色揃えてる
 の」
 と楽しそうな笑顔。
 千紗「え、どうせ外すのに」
 佐枝子「こうすると、外す時楽しいのよ」
 と、楽しそうな表情。
 千紗、佐枝子の横顔を見て、小さく微笑んで。
 響のN「もし母が、自分と同じクラスにいたら、友達になっただろうな。ふと、そんなことを思った。母の世界は、想像より何倍も、色鮮やかだった」
 千紗「…ねえ、午後さ、何か予定ある？」
 佐枝子「午後はねえ、盛沢山だね。4時から響を学校からバレエ教室に送ると、夜8時からスーパールのパートがあるかな」
 千紗「そっか、じゃあお昼はいっぱい食べないかね」
 佐枝子「そうね。なに作ろうかなー」
 千紗「…ね、おか：佐枝子？」
 千紗「（微笑んで）久々に、あれ、食べに行かない？」
 ○ハンバーガーショップ・外観
 「晴れ晴れ」との名前の小さいお店。
 ○ハンバーガーショップ・店内
 向かい合って、ハンバーガーにかぶりつく千紗と佐枝子。

千紗「千紗、目を見張って、

千紗「おいしいやっぱ晴れ晴れしか勝たん」

佐枝子「勝たん？」

千紗「焦って」あ：バンドがちょっとかたくて本当に美味しい」

佐枝子「ね！響とはよく来るけど、お母さんと来たの、初めてかも」

千紗「：また来ようよ、二人で」

佐枝子「笑顔で」うん」

千紗、ハンバーガーを頬張りながら、

佐枝子を見つめて、

佐枝子、髪が少し乱れており、顔色もくすんでいる。

千紗「：今日はメイクしないんだね」

佐枝子「え？普通の日はしないよ」

と、笑って。

千紗「あの日も、普通の日じゃない」

佐枝子「：学芸会？普通じゃないわ。ずっと楽しみだったんだもん」

千紗「響が、主役だから？」

佐枝子「：そうね。それとね：」

千紗「うん」

佐枝子「お母さん笑わないでよ」

千紗「うん」

佐枝子「おかしいけど、自分が舞台上がるような気分になっちゃったの」

千紗「：」

佐枝子「ほらあの子、私の小さい時とそっくりじゃない」

と、微笑んで。

千紗「そうだね」

佐枝子「でも、あの日、舞台上生き生きして、キラキラしてる響を見て、ふと気持ちいちゃったの。ああ、この子、私よりずっとすごいわって」

千紗「：」

佐枝子「響が、私の代わりに、やりたいことになるの。応援できて、今後どういう大人になるのかも楽しみで仕方がないし：ああ

私、もう十分だになって、これが生きがいかなって思ったの」

千紗「……佐枝子は、どんな夢持ってたの？ 子どもの時」

佐枝子「えー、忘れたの？」

千紗「……ごめん」

佐枝子「佐枝子、苦笑して、私、社交ダンスのダンサーになりた

かったの」

千紗「ダンサー？」

佐枝子「うん。小学校の時、一緒に『Shall we dance?』見たの覚えてる？」

（回想）

○映画館

暗い館内、佐枝子（6）と千紗（36）の顔がスクリーンの光に照らされてい

る。佐枝子、瞬きせずに目を見開いている。スクリーンの光が佐枝子の大きな瞳に反射している。

（回想終わって）

○ハンバーガーショップ

佐枝子「舞と正平のダンスシーン見て、すっかり魅了されちゃって。それが忘れられないくて、私もこの世界に入りたいて思っ

ちゃったの。バカよね」

と笑って。

千紗「ダンスの学校とか、行かなかったの？」

佐枝子「（微笑んで）お母さんが高いから無理よって、言っただじやない」

千紗「……そっか」

佐枝子「でも、行かなくてよかったわ」

千紗「……なんで？」

佐枝子「いつの間にか、ただの夢になっちゃ

ったから」

千紗「ただの夢……？」

佐枝子「持ってるだけで満足して、聞かれたら答えて、すごいねって褒められて：普段は、忘れちゃってた」

千紗「：」
佐枝子「でも、ちゃんと夢に向かって努力してる人見ると、羨ましいし、たまに、うつてなるけどね」

千紗「：社交ダンス」

佐枝子「ん？」

千紗「：ね、佐枝子、仕事の前に、ちょっと寄り道しない？」

○山辺中学校・教室

板書しながら説明している先生。

ノートをとりながら授業を聞いている生徒たち。

空、隣の席を見る。

直樹（13）、窓の外を眺めている。

先生「次の問題、じゃあ、藤田」

空と直樹「はい」

と、二人とも立ち上がる。

空「：あっ」

振り返って、笑う生徒たち。

直樹、空と目を合わせ、小さく微笑む。

○山辺中学校

放課後のチャイムが鳴る。

続々と教室を出る生徒たち。

直樹、空の机の横に来て、

直樹「帰る？」

空「う、うん」

○歩道

並んで歩いている直樹と空の後ろ姿。

空「：夕日に照らされ、長く伸びた二人の影。」

直樹「：帰宅部は俺たちだけか、このクラス」

直樹「：そうだね」

直樹、後ろを一瞬振り返る。

黙々と歩き続ける二人。

直樹、手をゆっくり空の手に近づけて、小指が触れる。空、驚いて手を素早く引いて、足が止まる。

直樹も足を止め、空を見つめて、

直樹「もう、だめ？」

空「：あ、ごめん、その、違う」

直樹「分かった。いいよ」

と、空に微笑みかけて、歩き出す。

空「待って」

と、足早に直樹に追いつく。

空、直樹の手を握る。直樹にぎごちな

い笑顔を向ける。

直樹「なにその顔」

と微笑んで。

手を繋いで歩いていく二人。

○雑居ビルの中・夕

佐枝子と響と千紗、扉の前に立っている。

ペンキが所々剥がれている扉にポスターが貼られている。

「社交ダンス教室。年齢不問。一週間無料体験受付中！衣装とシューズ、無

料で貸し出し可能！」

と、マーカーで書きで書かれている。

佐枝子「バレエ教室の二階に、こんなところ

あつたとはねえ」

響「響は知ってたよ」

○藤田家・一戸建て住宅の前

表札に「藤田」と書かれている。

直樹、空の手を放して、

直樹「また明日」

空「うん」

直樹、鍵で扉を開け、家に入る。

空、直樹が家に入ったのを確認して、庭にそっと足を踏み入れる。

○藤田家・キッチン

藤田敦（45）、カレーが入った鍋をかき混ぜている。

敦「お、早いね。部活は？」

直樹「：今日は、監督がいなくて：父さんこそ早くない？」

敦「たまにはコンビニ弁当じゃなくてちゃんとしたご飯も作ってあげたいと思ってさ、半日有給取ったよ」

直樹「そっか：いいのに。コンビニのごはん割と好きだし」

敦「あ、自分の部屋に入ろうとする。」

敦「あ、直樹、今日、父さんとキャッチボールしないか？部活の練習の代わりだと思っ
て」

直樹「直樹、振り返って、敦を見る。
直樹「いいよ。ちょうど：ちよつと話したいことあって」

敦「へえ、なんだろう」

敦「（気の付いて）なんだ？」

と、窓に近づいていく。

直樹も窓の方を見る。

敦「敦、窓を開けるが、特に何もない。
敦「カラスか」

食卓の上に、草餅が一箱置かれている。

○社交ダンス教室・休憩スペース

千紗、響を膝に抱えて教室の後ろの方に座っている。

社交ダンスの先生、美和靖子（30）、二人の隣に座っている。

靖子「お二人はいいの？」

千紗「はい、見守り隊です」

響「見守り隊です！」

靖子「（微笑んで）そう」

赤いドレスを身に纏った佐枝子、更衣室から出てきて、

響「（目を見開いて）お母さん：きれい：」

佐枝子「（照れて）ありがとう」

千紗「：すごく、似合ってるよ」

佐枝子、鏡の前に立つ。
佐枝子、鏡の中の自分をぼーと見つめて、目が潤う。

○社交ダンス教室・鏡の前

綺麗な衣装を身に纏った学生たち、鏡の前で等間隔に並んで踊っている。
佐枝子、一番後列で皆の動きを真似ながらステップを踏んでいる。
ペアでルンバを踊り始める学生たち。
靖子、千紗に手招きする。

× × ×

佐枝子と千紗、ペアを組み、他の生徒と動きを合わせ、ターンをする。

千紗が佐枝子の手を上に取り、佐枝子、ゆっくりターンする。

目が合う佐枝子と千紗。

佐枝子、照れくさそうに笑顔を浮かべて。千紗もつられて微笑んでいる。
響、そんな二人を後ろの席で嬉しそうに見守っている。

○公園・夜

直樹と敦、10メートルほど離れて向かい合っている。手にはグローブを付けている二人。

敦「もっと強く！こう！」

と、速い球を投げ返す。

直樹、キャッチできず、ボールを拾いに行く。

敦「大丈夫大丈夫」
空、遊具の陰で、二人を見ている。

直樹「息が少し切れている。
直樹、ボールを拾って、立ち上がる。

敦「なに？」

直樹「俺：普通じゃないかも」
敦「え？」

直樹「普通じゃないんだ」
 敦「（笑って）最初から上手いやつなんていないよ」
 直樹「父さん、俺、俺って：ゲイかも」
 敦「どこで覚えたんだ、そんな言葉」
 直樹「調べた」
 敦「：」
 直樹「今学校に、好きな人がいてさ。でも、周りの人に知られたくなくて、俺もそれが恥ずかしくて：でも、その人の前では、もう恥ずかしい自分でいたくない。だから、その：父さんなら、どうするの？」
 敦「：どうするって」
 直樹「一人で悩まないで、信頼できる人に相談してって書いてあったから」
 敦「：女の子のことは、かわいいとか、思うか？」
 直樹「：時々、思う」
 敦「じゃあ、大丈夫だよ。これから大人になったら、分かるよ直樹も。普通になるよ」
 直樹「：なるかな」
 敦「思い込みだよ」
 直樹「思い込み？」
 敦「世の中の、ずれてる人たちっていうのはな、大体思い込みから始まるんだよ」
 直樹「：」
 敦「よし：今日は、帰ろっか」
 と、グローブを脱いで、木陰に置いた荷物に向かって歩いていく。
 敦「かばんを拾い上げると、目の前に空が立っている。」
 空「話聞けよ」
 敦「えっと、敦を見上げ、睨んでいる。と、直樹を見る。」
 直樹「目をそらす。」
 敦「空のまっすぐな目をしばらく見つめて。」
 敦「：君か」

空「話聞けよ、父親のお前を、信頼できると思っ
て話してんだろ」

空「敦、苦笑して、立ち上がる。」

空「敦の襟を掴み」話聞けつつてんだろ！」

空「今日ちゃんと話せてたら、変わってたか
もしれないんだぞ！」

直樹、空と敦を必死に引き剥がそうと
する。

空「あの俺は：、お、俺は：あ！」

空、口をパクパクさせるが声が出ない。

空「直樹は：！な：！」

敦、空を突き離す。

空、地面に尻もちをつき、息切れして
いる。

空「言わせろよ！！」

と、夜空に向かって吼える。

敦、直樹の腕を引っ張り、公園を出る。

直樹、振り返って、空を見る。

空、地面に跪き、肩を震わせ泣いてい
る。

○水上家・古い一軒家・和室

千紗と空、向かい合ってお茶を飲んで
いる。

晴美、二人の前にせんべいの入ったお
皿を置いて、

晴美「ずいぶん仲良くなったね、お二人ね」

千紗「（笑顔で）うん」

晴美「じゃあ、今日買ったお野菜でお昼ご
はん作ってくるから、話しててね」

空「ありがとう」

晴美、鼻歌を歌いながら和室を出る。

千紗「息子さんに、会えましたか？」

空「会ったよ、中学校で。同じクラスだから」

千紗「へえ、だから空を選んだんですか」

空「空は、初恋なんだ。息子の」

千紗「（少し動揺して）：そうなんですネ」

空「（俯いて）過去の自分にも会ったよ。教
えてあげたかったが、何も言えなくて、何

も、できなかった」

空「一瞬、思ったんだ。過去に戻る時間を

もらえるなんて、俺ってラッキーだなんて」

千紗「……」

空「でも、ただ、ただ自分の無力さと、愚かさ、を、直面して……ただ、苦しみが増すだけじゃないか」

千紗「……千紗、空を見つめて。」

千紗「……息子さんは、いつ亡くなられたんですか？」

空「2025年、4月の16日だ……時刻まで、正確に覚えているよ……0時を少し過ぎていて、ちょうど、直樹の誕生日なんだ」

千紗「なおき……待って、あなたの、苗字って」

空「……藤田」

千紗「（顔から血が引いて）え……」

空「どうした」

千紗「直樹の写真、ありますか？」

空「スマホのホーム画面を千紗に見せる。体操服を着て並んで座っている中学生の空と直樹。直樹、右目の下にほくろ。

（回想）

○同・早川家・玄関

響「……響、扉を開ける。」

響「……先生」

直樹「……直樹、優しい笑顔を浮かべて。」

直樹「……今日、『よいこ』の日だね」

○河川敷

響「……でも先生、昼休みまたぼっちになるでしょ」

直樹「（苦笑して）いいよ、慣れるから」

響「先生も、一人暮らしでしたっけ」

直樹「……いや、父と、実家で」

（回想終わって）

○水上家・和室

千紗「その次の日：」

空「え？」

千紗「私の担任の先生なんです。藤田先生は」

空「：本当か？」

千紗「いつも、昼休み一緒にお弁当食べて、

先生も、集団行動が苦手って共感してくれ

て、たまに同じアイドルが好きで、それ

で、仲良くなったんです」

空「君は、いつから来た？」

千紗「2025年、4月15日の夜」

空「そうか：そうか：ってことは」

千紗「先生が亡くなる、数時間前：」

空「（頭を覆って俯いて）そうか：」

千紗「そういえば、先生、引越すって言っ

てたんですけど：」

空「：ああ」

（回想）

【4月15日】

○藤田家・外観

雨が降っている。

小走りで扉に向かうスーツ姿の直樹。

直樹、扉の外で濡れたスーツと髪をハ

ンカチで拭いて、

直樹「急に降ってきたな：」

と、空を見上げて。

○藤田家・玄関

直樹「ただいま」

返事がない。

直樹、嫌な予感がして、急いで自分の

部屋へ向かう。

○同・直樹の部屋

直樹、扉を勢いよく開ける。

敦、床で開かれています。スーツケースの

直樹「：父さん」

前ですわがんでいる。

敦「どういことだ」

直樹「勝手に部屋入ってこないでって言った

よね

と、スーツケースをベッドの下にどけようとする。スーツケースの中、衣類の横に大量に入っている手紙の封筒が見える。敦、手紙を一通取る。直樹、止めようとするが、間に合わず。封筒の裏面に、「水上空」と書かれて

敦「：この子って確か、中学の時、お前と仲良くしてた子だよな」

直樹、黙っている。

敦、封筒の中から紙を取り出す。

直樹、敦から手紙を奪おうとするが、敦、直樹を強く押しのける。

手紙に長い文章が丁寧な文字で書かれている。最後に、「大好きだよ。空よ

敦「：気持ち悪い」

と、嫌悪に満ちた表情。

直樹、敦の顔を見つめ、敦の腕を掴んでいた手をゆつくりと離す。

○同・ダイニングルーム

直樹と敦、向かい合ってコンビニのお弁当を食べている。

互いに目を合わせず、無表情で黙々と食べている二人。

○同・庭

庭の芝生に散乱している手紙の封筒。雨に打たれ、文字が滲んでいる。

○オフィスビルの一階

敦、小さいダンボールを抱えて、受付嬢「あの、水上空さん、いますか」

受付嬢「はい、水上空さん、確認してまいりますので、少々お待ちください」

と、電話を取って。

○同・待ち合わせスペースから降りて、敦と目が合う。

○同・待ち合わせスペースのソファ向かいあつて座っている敦と空。二人の間の机に開かれた段ボールが置かれていて、濡れ文字が滲み、クシャクシャとなつた手紙の封筒が大量に入っている。

空「：直樹が、そう言つてたんですか」

敦「あ。もうあんたとは終わりだつて」

空「：あの、やっぱり、直樹の言葉が、直接聞きたいです」

敦「：」

空「会わせてもらえないでしょうか」

敦「会つても意味ないでしょう」

空「直樹は、こんな別れ方する人じゃない」

敦「調子に乗るな。お前に、直樹の何が分かる」

空「：全部は分からないですけど、あなたよりは、分かつてるつもりです」

敦「は？」

空「あなたよりは、直樹を幸せにできる。そう、思っています」

敦「顔に血が上り、封筒が入った段ボールを強く地面に払いのける。

封筒が散乱する。

ソファに座っている人々、驚いて敦と空を見つめる。

敦「お前が直樹に、道を踏み外させたんだ」

空「：」

敦「お前が、直樹を苦しめてるんだよ」

空「空、敦を真っ直ぐ見つめて。普通の人生を送って

敦「：直樹は今日から、普通の人生を送って

くよ。だから、もう、邪魔しないでくれ」

○ 藤田家・直樹の部屋・夕

直樹、机の前に座っている。

後ろのベッドに置かれているスマホに、

「空」から何件も通知が届き、続いて

「空」から電話の着信音が聞こえる。

直樹、スマホを顧みず、茫然と窓の外を見つめている。

○ 車道・夜

運転している敦、信号を待っている。

窓の外にケ―キ屋が見える。

敦、ケ―キ屋を見つめて、ウィンカーを付け、右に曲がる。

○ 歩道・夜

直樹、空を見上げながら一人でゆっく

り歩いていく。

直樹の隣を通り過ぎる家族。

幼い男の子が真ん中で歩き、左右で父

と母の手を繋いでいる。

男の子「今日なんでしゃぶしゃぶ行けるの？」

男の子「今日はいこの日なのよ」

男の子「父、4月15だからね」

男の子「僕がよいこだから？」

男の子「母、そう、今日はよいこにだけ、ご

ちそうするのよ」

男の子「悪い子は？」

男の子「父、悪い子は、なにもない」

屈託なく笑う男の子。

直樹の横の線路を、電車が通過する。

騒音とともに、電車の窓の光が、少し

ばかりの間に、直樹の顔を照らす。

直樹、目に涙を溜めながら、口を半ば

開き、笑っているような表情。

直樹の横の車道を、敦の車が通り過ぎ

る。

互いに気づかない二人。

（回想終わって）
 ○ 水上家・古い一軒家・和室
 空「：あれが、最後の日だったんだ」
 千紗「：なんで、二人を応援できなかったんですか？」
 空「浅はかな見栄っ張りだよ」
 千紗「：」
 空「：別れた妻に見せてやりたかった。俺は一人で直樹をこんなに立派に育てたぞって、自慢して：離婚して、家を出たことを、後悔させてやりたかった」
 空「：だから、普通じゃない道を歩む直樹が、いやだった。恥ずかしかったんだ：でも、もう、過去は変えられないんだ。直樹は戻れない。俺は一生、苦しんで、後悔して、みじめに生きていく。それでしか罪を償えないんだ」
 空、涙が流れて。
 千紗「：私も：お母さんが、いやだった」
 空、顔を上げ、千紗を見る。
 千紗、響の姿に変わる。
 響「会社で働いたことがなくて、おしゃれ全然なくて、話題はいつもテレビ番組の話で：同じ話何回もするし、記憶力が悪くて、いつも何かしら忘れてて。ウザかった。いやだった」
 響、嗚咽して、
 響「いつもすぐイライラして、次は、優しい娘でいようと思ってても、口から出るのは棘がある言葉ばっかで：母の愛がなくなったら、母に、娘の愛も、一度もちゃんと、あげられなかった：」
 響、千紗の姿に戻る。
 千紗と空、涙が止まらずに溢れて、
 晴美「お待たせー、てんぷらよー」
 と、とんぷらが盛られたお皿を持って、和室に入り、泣いている千紗と空が目に入る。
 晴美「どうしたの？！」

と、皿を置いて。

晴美、二人の間に座り、二人の背中をさすって、

晴美「どうしたのよ：千紗ちゃんまで」

泣き続ける空と千紗。

晴美、空と千紗の手を持って、繋ぎ合わせる。

晴美「大丈夫よ。大丈夫、大丈夫」

と、二人の手を自分の両手で包んで。声を上げて泣く千紗と空。

空「泣きながら：なおき」

晴美「：直樹くん？そういえば、直樹くんから、今日の夕方遊ばないかって電話来てたわ」

泣き止む空。

千紗も泣き止み、鼻水をすすって。

○社交ダンス教室・夕

佐枝子、赤いドレスを身に纏い、シューズを履き替えている。

千紗、入り口近くに座っている。

扉が開き、空と、その後ろに隠れて直

樹が入ってくる。

千紗、立ち上がり、直樹を見つめて、

目が潤う。

直樹、少し戸惑い、空を見る。

空「この人。俺が言ってた友達」

直樹「（千紗に）初めまして、藤田直樹です」

千紗、微笑んで、

千紗「初めまして」

○同・休憩スペース

教室の後ろに座っている千紗、空、直樹と佐枝子。

靖子、何着かの衣装を抱えて、直樹の前にしゃがむ。

靖子「いろいろあるわよ」

と、男性用社交ダンスの衣装を一着ずつ直樹の前で広げて見せる。青いドレスが一着混ざっている。

靖子「あ、これは違うわね」

と、青いドレスを端にどける。

直樹、青いドレスを見つめて。

直樹の隣に座っている佐枝子、直樹の

視線に気づいて。

佐枝子、青いドレスを持ち上げ、広げ

る。

佐枝子「綺麗ね」

と、直樹に微笑みかける。

直樹、はにかみながら、頷いて。

○同・鏡の前

ペアで踊っている生徒たち。

一番後列で、手を繋いで、目を合わせ

て踊っている佐枝子と直樹。

直樹、青いドレスを身に纏っている。

ドレスのラメがキラキラと光っている。

佐枝子に手を引かれながらターンする

直樹、心から楽しそうな笑顔を浮かべ

ている。

二人を見守っている空、目が潤う。

○同・休憩スペース

休憩している生徒たち。

佐枝子と直樹、窓際の机で向かい合っ

て座り、飲むゼリを飲んでいる。

佐枝子「直樹くん、私より全然うまいわ」

直樹、はにかむように笑って。

佐枝子「楽しかった？」

直樹「うん：最近で一番」

佐枝子、微笑んで。

○同・扉の前

敦、教室の扉を開け、入ってくる。

直樹を見つかけ、陰しい表情で二人のと

ころへ向かう。

空、敦の腕を掴む。

椅子に座っている千紗、厳かな表情で

敦に「こっちへ」の手招きをして。

敦、怪訝そうな表情を浮かべながらも、

千紗の方へ向かう。

○同・休憩スペース

直樹「直樹、自分の青いドレスを見つめて。
佐樹「佐樹さん、なんで僕が、このドレス
がいいって、分かったんですか」

佐樹「佐樹、微笑んで、
このドレス、好きって」

佐樹「直樹、少し照れて、目をそらす。
佐樹「大事にしてね。直樹くんの、好きっ
て気持ち」

直樹「：」

佐樹「：」

佐樹「：」

佐樹「：」

佐樹「：」

佐樹「：」

佐樹「：」

佐樹「：」

佐樹「：」

佐樹「：」

佐樹「：」

佐樹「：」

佐樹「：」

佐樹「：」

佐樹「：」

いなつて思ったこと、ないですか」
 佐枝子、直樹を見つめて、
 直樹「：いや：ごめんなさい」
 佐枝子「ううん、いっぱいあるわ」
 と、微笑んだまま、俯いて、
 直樹「：」
 佐枝子、顔を上げて、
 佐枝子「そういう時に、思い出してることがあるの」
 直樹「どんなこと？」
 直樹「：」
 佐枝子「昔、不思議なお店に入ったことがあってね。そこで教えてもらったことなんだけど」
 直樹「：」
 佐枝子「実はみんな、自分で選んでるの。自分の人生のシナリオをね」
 直樹「シナリオ：」
 二人の会話に耳を傾けている千紗、佐枝子「うん。生まれる前に、たくさん人の生の本を読んで、これ面白そうって選ぶんだって」
 直樹「：」
 佐枝子「このシーンいいなとか、この人に会いたいなとか。生きてみる価値があるって感じたところが、どこかにあるから、選んだの」
 直樹「：会いたい人」
 佐枝子「うん。誰のこと、思い浮かぶかな」
 直樹「うーん」
 佐枝子「お母さんとか、お父さんとか、あるいは、友達とか：」
 直樹「そっか：」
 千紗と空と敦、後ろの椅子で直樹と佐枝子の会話に耳を傾けている。
 直樹「：母さんは、父さんと僕といるのが嫌になつて、出てっちゃったんだ」
 佐枝子「：」
 直樹「：父さんも、違う気がする」

佐枝子「：」 敦、直樹の横顔を見つめて、
 直樹「：」 二人にとって僕は：失敗作だと思う」
 佐枝子「：」
 直樹「父さんはたぶん、もともと僕のこと、
 わりと好きだったんだ。僕も、父さんのこ
 とは好き。けどたぶん、がっかりして、も
 う好きじゃないんだ」
 佐枝子「：」
 直樹「：」 でも、この人生を選んだってことは、
 今後、幸せなことが起こるし、父さんも僕
 のこと、また好きになってくれるのかな」
 佐枝子「：」 お父さん、バカね」
 と、直樹の手を握って。
 敦、立ち上がって、直樹に歩み寄る。
 直樹「直樹、敦に気付いて、立ち上がる。」
 直樹「（怯えた表情）父さん：」
 敦「：」 敦、直樹を抱きしめて、
 直樹「直樹、敦を押しつけようと抵抗する。
 敦、直樹を強く抱きしめて離さない。
 敦、肩が震えている。
 直樹、直樹を見上げる。
 敦「：」 直樹「：」
 直樹「直樹、敦の胸に、顔を埋め、目に涙が
 溜まる。」
 靖子「キヤー！」
 千紗、胸を抑え、椅子から崩れ落ち倒
 れている。
 千紗に駆け寄る空。
 空に続いて、千紗に駆け寄る靖子と敦
 と直樹。
 千紗、意識が朦朧とし、次第に目を閉
 じていく。
 響の N「：」 おばあちゃん、あと一日だけだよ
 ：もう少しだけ、もう少しだけ：がんばっ
 て：」
 千紗の首と頭を支えている空。
 震えた手で携帯電話を開いている佐枝

子。
状況に動揺し泣いている響：

○ 藤田 家・キッチン・夜
冷蔵庫の前に立っている直樹と敦。

敦 「何つくろうかな」

と、冷蔵庫を開けるが、食材がほとんど入っていない。

野菜室にきゅうりが二本入っている。

× × ×

敦、きゅうり二本を洗い、一本を直樹に渡す。

敦 「うわ、渋いなこれ」

直樹 「貸して。こうするとちよっと美味しくなるらしいよ」

と、きゅうりを二つに折り、断面と断面を擦り合わせる。

白い泡が出始め、直樹、泡を洗い流し、

きゅうりを齧る。

直樹、頷き、敦を見つめる。

敦、直樹を真似て、同じようにして、

きゅうりを齧る。

敦 「：ほんとだ。うまい」

と目を見張る。

敦 「直樹、表情が少し緩む。」

直樹 「こんなの、どこで知ったんだ？」

と、きゅうりを齧る。

敦 「そうか。家庭科好きなのか？」

直樹、少し迷って、

直樹 「：うん」

敦 「へえ、なんで？」

直樹 「料理楽しいし：あと、裁縫も好きだから」

敦 「そうか」

直樹 「父さんは？好きな教科」

敦 「好きな教科か：体育かな」

直樹 「へえ、なんか：っぽい」

敦 「直樹も体育好きか？」

直樹「なるほどな、野球は？」
 敦「え、そうか」
 直樹「父さん」
 敦「うん」
 直樹「実は、野球部入ったの、嘘だったんだ」
 敦「父さんが野球部のキャプテンだったから、野球部入ったら喜ぶかなと思って」
 敦「じゃあ、今、部活は？」
 直樹「帰宅部」
 敦「無言できゅうりを食べて。」
 直樹「直樹、目を伏せて、」
 敦「ごめん、父さん」
 敦「一緒だな」
 直樹「ええ」
 敦「俺も本当は帰宅部だったんだ」
 直樹「え？」
 敦「野球部なんか、先輩怖えし、坊主嫌だし、一週間でやめたよ」
 直樹「と、笑顔を浮かべて。」
 敦「直樹、敦を見つめて、」
 敦「やつぱ親子って、似るんだなあ」
 直樹「直樹、嬉しそうな笑顔を浮かべて。」
 敦「つめて、」
 敦「直樹の前にしゃがんで、直樹を見ない」
 直樹「父さんの、生きる理由で、生きがいなんだ」
 敦「でも直樹の生きがいは、当然父さんじゃなくていい」
 直樹「僕は、何のために生きるの」
 敦「自分の生きがいが、なにか、分からないんだ」
 敦「微笑んで、直樹の手を握って、」

敦「分からねくていいんだよ。誰だっていい、何だっていいんだ」

直樹「……」

敦「直樹の人生の、ここからの楽しみなんだろ」

直樹、敦の目を見つめ、涙ぐむ。

突然、窓の外から、ぐうとお腹が鳴る音が聞こえる。

敦、立ち上がり、窓のほうへ向かう。

敦「カーテンを開ける。」

驚いた表情をした後、表情が緩んで。

敦「直樹、今晩は、三人でメシ食おう」

直樹「三人？」

と、窓に歩み寄って、外を覗く。

空、窓の外で一人立っている。

空、穏やかな表情を浮かべながら、直樹に手を振っている。

直樹、微笑んで、手を振り返す。

○病院・四人部屋の病室・朝

鳥のさえずりが聞こえる。

佐枝子、千紗子のベッドの傍に座っている。

千紗、ゆっくりと目を開ける。

佐枝子「あ、お母さん、よかった……」

と、涙の跡が残る目を袖で拭いて。

佐枝子「体調は、どう？どこか痛い？」

千紗「……お腹空いた」

佐枝子「そうだよね、もう半日も何も食べてないもんね」

千紗「退院したら、また『晴れ晴れ』、食べに行こうよ」

佐枝子、頷いて、

佐枝子「うん。じゃあお母さん、長生きしないかね」

千紗「……あなたもよ」

佐枝子、微笑んで、

千紗、響の姿に変わる。

響「ずっとずっと、響にお母さんの背中、見せてあげてね……いなくなっちゃ、だめだから」

らね」

と、目に涙が溜まって。

佐枝子「もちろんよ。響の花嫁姿、一緒に見ようね」

響「唇を噛み、涙を我慢して、

響「：結婚しないかもしれないじゃない」

佐枝子「そっか。じゃあ、響の成人式、一緒に

響「：いいね」

佐枝子「袴も一緒に選んでよ。お母さんのセンスなら間違いないから」

響「あなたと響は、何色がいいかで、喧嘩

しそうだもんね」

佐枝子「フッフ、しそうだね」

響のN「伝えたいこと、話したいこと、本当

は他にたくさんあったけど、最後まで、言葉には上手くできなかった。でも、この一週間のすべてが、眩しい輪郭を残して、振り返るといつもそこにあった」

(回想)

○早川家・リビング

ハンガーから洗濯物を外している佐枝子と、服を畳んでいる千紗。佐枝子、水色のTシャツが掛けられている水色のハンガーを持ち上げ、誇らしげに千紗に見せる。笑う千紗と佐枝子。

○ハンバーガーショップ「晴れ晴れ」店内

向かい合ってハンバーガーを食べている佐枝子と千紗。千紗、満足げな表情でハンバーガーを美味しそうに食べている。佐枝子、千紗を愛おしそうに見つめて、自分もハンバーガーを頬張る。

○社交ダンス教室・休憩スペース
赤いドレスを身に纏い、鏡の中の自分

を見つめて、涙ぐんでいる佐枝子。
その横で、潤んだ目で佐枝子を見つめ
ている千紗。

○社交ダンス教室・鏡の前
ペアで、ルンバを踊っている佐枝子と
千紗。
手を互いの腰に回し、支え合っている。
佐枝子が千紗の足を踏んだり、千紗が
佐枝子のドレスを踏んだりして、あた
ふたしながら、必死に踊っている二人。
千紗に手を引かれ、ターンする佐枝子、
少女のような笑顔を浮かべている。

（回想終わって）
○病院・四人部屋の病室

佐枝子と響、手を握り合っている。
佐枝子、寝ている響の額に、自分の額
をそっと寄せる。
響、千紗の姿に戻る。
風がカーテンを揺らし、窓から差し込
んだ陽の光が千紗と佐枝子を優しく照
らす。
響のN「それは、私が過ごしたことがない時
間で、でも確かに、母と私だけの、最後の
時間だった」

○「人生の本」店内・夜
机にうつ伏せで寝ている響、目を覚ま
し、上体をゆっくりと起こす。
周囲を見回すが、誰もいない店内。

○早川家・アパートの廊下
響、扉の前に立ち、深呼吸をして、扉
を開ける。

○早川家・玄関
響、扉を開け、
響「……ただいま」
と、何かを期待するように立ち止まっ

て。
返事がない。
電気がついていない真っ暗な部屋。

○同・リビング

響、キッチンのカウンターを見る。

骨壺が置かれている。

キッチンには、母のスリッパが床に落ちている。

響、スリッパを綺麗にそろえる。

響、ふと時計を見る。

時計の針、11時50分を指している。
響、家を飛び出す。

○歩道

人も車も通っていない夜の道。

全力で走っている響。

おじいさんの声「あなたが過去で何かを変えようとしても、お母さんの未来は、変わらない。死んだ人は、生き返れないんだ。魂であるあなたの意志のものと行動では、その世界の相手の人生と、未来へ変化を与えられることができない」
走る響。

響「：でも」
走る響。

響「：私は、もう、魂じゃない」

直樹の声「夜はね、その橋から見るとすごく綺麗で。全然通らなくてさ、気に入って秘密にしてたけど、早川にだけ教えてあげよう」

空の声「自殺したんだ。少し前に：川に、飛び込んで」

○河川敷

空の声「河川敷の道で走り続ける響」。

直樹の誕生日なんだ」
目の前に大きな高架橋が架かっている。

○高架橋の階段
響、階段を上り切り、高架橋の歩道に上がる。
風が吹く。
突然、何かが水に落ちる音。
響、血の気が引いて、橋の中央へと走る。

○高架橋の上の歩道
走る響、息が大きく切れている。
橋の柵に寄りかかっている人影が見える。

男性 1 の声「うわー昨日買ったばつかなのに」
男性 2 の声「さすがに拾えないな。普通こんな細い柵に水筒置かないよ」
男性 1 の声「はあ、新しいの買うかー」
男性 2 の声「そうだな」
と、歩き出す二人の男性。
街灯に照らされる二人の横顔、直樹と空（23）である。
響、二人を茫然と見つめる。
響、力が抜け、蹲る。
顔を膝に埋めて、肩を震わせている響。
涙が地面に落ちる。
直樹、振り返って、響に気付く。

直樹「早川？」
響、顔を上げる。
直樹と空、走って響に駆け寄る。
響、直樹たちに気付いて、立ち上がる。

直樹「大丈夫？」
響、直樹の顔を見て、笑顔のまま涙を流し、
言ったじゃないですか」
と、直樹を軽く突き放す。
直樹、困ったような優しい笑顔を浮かべて、
空、状況が分からない様子。

直樹「（空に）この子は：一番の友達なんだ」
空「そうなんだね」

唇を噛んで涙を我慢している響。
 響、直樹の胸に顔を埋め、声を上げて泣く。
 直樹、少し困惑ながら、響の頭に手を優しくのせて：
 × × ×
 高架橋の上を独り歩いている響。
 響の前で、佐枝子が歩いている。
 響、佐枝子の背中を見つめ、立ち止まる。
 響「お母さん」
 佐枝子、立ち止まり、振り返って、響に優しく微笑みかける。
 ○電車内・朝
 制服姿の響、吊り革に掴まりながら、窓の外の景色をぼんやりと眺めている。ふと横目で、隣の乗客のスマホ画面が見える。
 「2025年最新版！アイドルグループ挙紹介」とのタイトルの記事である。響、乗客の顔をちらっと見る。
 スーツ姿の敦（55）である。
 敦「（独り言）あっこれが、直樹の好きなグループか！」
 響、敦をしばらく見つめて。
 響「（小声で）違いますよ。グループ卒業して、ソロデビューした人が推しなんです」
 敦、驚いて、怪訝そうに響を見る。
 響「（急に自信を無くし）すみません」
 敦、目を見開き、
 敦「：あなた」
 と、響の顔を見つめる。
 幼い頃の響の顔が一瞬重なる。
 敦「：」
 響「また：教えてあげてもいいですよ」
 敦、響の顔を見つめ、次第に固まっていた表情が和らぎ、涙が目に溜まる。
 敦「お母さんは：戻ってきたのか：？」
 響、首を横に振って。

敦「…そうか」

と表情が曇って。

敦「…あなたが未来を変えてくれた。直樹を、
救ってくれた！」

響、首を横に振って、

響「あの時の私たちじゃ無理でした…過去を
生きていた母と、この10年間の敦さんで
す。先生の未来を変えたのは」

敦、涙が頬を伝って流れる。

響「でも、負けてないですよー。ちゃんと変
わりましたから。母も、私も」

と、力強いまなざしで、窓の外を見つ
めて。

敦、響の横顔を見て、

敦「…若返ったな」

響、敦を見て、

響「老けましたね」
目を合わせ、笑顔になる二人。

【2年後】

○車の中

直樹（25）、運転している。

助手席に空（25）、後部座席に、敦
（57）が座っている。

直樹「ついた」

と、少し古い一軒家の前に車を止めて。

空「そんな緊張しないでいいよ」

と、直樹の手に手を重ねて。

直樹、空と目を合わせ、微笑む。

敦、窓の外の一軒家を興味津々に見て
いる。

敦「だいぶ変わったな…12年か…」

一軒家の玄関の扉が開き、晴美（78）
が出てきて、手を振っている。

腰が曲がり、髪が真っ白になったが、
以前のままのにこやかな表情。

空、笑顔で手を振り返す。

敦、晴美を見つめて、微笑む。

○水上家・リビング

並んで座っている空、直樹と敦。
直樹、緊張した表情。
敦、直樹の背中を掌で軽く叩いて。
直樹、敦を見る。
敦「（小声で）大丈夫」
と微笑んで。
晴美、三人の前に桜餅の乗ったお皿を出して、
晴美「はい、召し上がれ」
と、座って。
直樹と敦「ありがとうございます」
空「ありがとうございます」
晴美「いいえー遠いところからありますがねー。直樹くん、うわさには聞いてたけど、なかなかの美男子だね」
直樹「直樹、顔が赤くなり、」
直樹「いえいえ：」
空「空、笑って、」
空「ばあちゃん」
晴美「（敦に）お父様、お名前は」
敦「あ、藤田敦です」
空と直樹、桜餅を口に運ぶ。
晴美「敦さんね」
空「あ、ばあちゃん、お茶ってある？」
晴美「あ、あ忘れてたわ」
と立ち上がった。
敦「あ、僕やりますよ」
と、晴美を止め、
敦「座っててください」
と、微笑んで、キッチンに向かう。
敦、キッチンの物置からお茶の袋を取り出し、棚からお茶のコップを4つ取り出し、手際よくお茶を淹れ始める。
晴美「晴美、不思議そうに敦を見つめて、慣れるわ」
敦「あ：なんとなく：適当で、すいません」
と苦笑して。
晴美「ふーん」

空「ね、ばあちゃん」
 晴美「うん」
 空「実は今日、僕と直樹から一つ話したいことがあるんだ」
 晴美「うん」
 空「僕たち、付き合ってるのは、ばあちゃん、認めてくれてたよね」
 晴美「直樹さん、素敵な人だし」
 と、微笑んで、
 直樹も微笑んで。
 空「実は、もう少し先に、僕たち進もうと思っ
 晴美「先？」
 と、少し真剣な表情になって、
 敦、4人分のお茶をそっと机に置き、座る。
 空「結婚、とは言えないけど、僕たちはそういう心持ちで」
 と、直樹を見る。
 直樹、空を真つ直ぐ見つめて。
 敦、真剣な表情で話を聞いている。
 晴美「……うん」
 空「パートナーシップ制度というのに申し込んで、正式なパートナーになろうと思ってるんだ」
 晴美「パートナーシップ？」
 空「うん。普通の結婚と比べて、できないことも多いけど、そうすると、何かあった時、家族として病院で面会できたり、手術の同意とかもできたりするんだ」
 晴美「……へえ」
 空「でも、そうするとね」
 晴美「うん」
 空「そうすると：母さんと、ばあちゃんと、血の繋がった子どもは、この先でなくなってしまうんだ」
 目を伏せ、黙り込む晴美。
 空と直樹と敦、緊張した表情。
 晴美、空と直樹を見つめて、
 晴美「二人は、家族になるんだね」

直樹「はい」空、頷く。

晴美「20年くらい前は、こんな人生、もう嫌やわって思ってたわ」

食卓の上に置かれた一枚の写真。

中年の頃の晴美と若い女性、桜の下で寄り添って立ち、笑っている。

若い女性、腕に赤ちゃんを抱えている。

晴美「私のすべてだったあの子を、失ってかわら、人生、こんな苦しいものなら、早く終わってしまえって思ってたわ」

晴美「でも、まだ赤ん坊だった空がこの家に来て、空を育てるようになってから、世界が変わったわ。忙しいけど、本当に楽しくてね、毎日、毎日、明日が来るのが楽しみになったの。私の、光だったわ」

晴美「空、涙ぐんで。」

晴美「：これから、あんなたちが、お互いの光になるんだね」

晴美、食卓の上の写真を見る。

空を抱いている空の母、優しく微笑んでいる。

晴美、写真の中の空の母の頬に指で触れ、涙ぐみながら微笑んで、

晴美「：そう言うと思ったわ」

○アパートの一室・玄関・朝

響、靴を履いている。

靴箱の上には骨壺と佐枝子の写真。

佐枝子、社交ダンスの赤いドレスを身に纏い、髪を後ろに綺麗にまとめている。

「アマチュア部門銀賞」と書かれたトロフィーを手に持ち、横には響が写っている。大きな笑顔の二人。

響、写真を見つめて、微笑む。

響「行ってきます」

○ 歩道

歩いてゐる響、十字路を真っ直ぐ進む。
ふと、立ち止まり、振り返る。

○ 街角

響、道路の向かい側を見つめている。
「人生の本」があつた場所である。
店舗が跡形もなく、古い自動販売機が
置かれてゐるだけである。
響、微笑み、また歩き出す。

○ 歩道

犬を散歩しているおばあさん、響の向
かい側から歩いてくる。

響「おはようございます」

おばあさん「おはよう響ちゃん」

おばあさん「しゃがんで、犬の頭を撫でる。
すぐ美味しかったよ」

響「ほんとですか！よかった」

おばあさん「今度よかったら、作り方教えて
もらいたいわ」

響「もちろんですよ」

おばあさん「どこで覚えたの？作り方」

響「実は、母のレシピなんです」

おばあさん「：なんでもできるお母さんだつ
たねえ」

響「と、氣遣つて、心配そうな表情。」

おばあさん「そうすね」

響「はい、ありがとうございます」

おばあさん「不安なことあつたら、なんでも
言つてね。なんとか、やつていけそう？」

響「はい、ありがとうございます」

おばあさん「安堵した表情。」

響「いつも、母の背中を頼りに進んでます」
と、微笑みを浮かべ、遠くの空を見つ
めて。

○ 河川敷・夕

桜の並木、風に揺られている。
 響（19）と直樹、河川敷に座っている。
 響のスマホで、一緒にタクト（26）の動画を見ている。
 動画の中で、箱の中に手を入れ、箱の中の蛙に手を伸ばすタクト、蛙に触れた瞬間、声を上げて飛び上がる。
 フフフと一緒に笑う響と直樹。
 × × ×
 動画の中で、お辞儀をしているタクト。
 動画が終わる。
 響、スマホをかばんにしまいながら、
 響「やっぱ推しかわいいわ」
 直樹「ね」
 直樹、かばんから草餅を二つ取り出し、
 響に一つ渡す。
 響、微笑んで、草餅受け取る。
 草餅を食べながら、川を眺めている二人。
 響「ねえ、先生。草餅の草ってなんの草か知ってますか？」
 直樹「なんの草？」
 響「ハハコグサ」
 直樹「ハハコグサ」
 響「母と子って書いて、母子草」
 直樹「：」
 響「白い綿毛に包まれてて、黄色い小さい花を咲かせてるのが、母が子を抱いているように見えるからなんだって」
 直樹「へえ：」
 と、手に持っている草餅を見つめて。
 響「：先生は、お母さんと、どのくらい会ってないんですか」
 直樹「15年くらいかな：小学生の時に、母が家出して以来、ずっと」
 響「連絡をもらったりは：」
 直樹、首を横に振って。
 響、自分が手に持っている草餅を見つめて。

直樹「でも、まだ、会わないほうがいいな」
 直樹「響、直樹の横顔を見る。」
 直樹「15年間、毎月1日に、家に届くんだ。」
 一度も、途切れたことなくてさ」
 響「……」
 直樹「結構、すごいよね……」
 響「……」
 直樹「でも、たぶんこれは、愛じゃない」
 響「……」
 直樹「痛みなんだ」
 直樹「……」
 直樹「毎月、食べかけの草餅を見つけて、母は、前に進んでるんだと思う」
 響「……」
 直樹「直樹の横顔を見つけて。」
 直樹「直樹、穏やかな表情。」
 直樹「草餅を口いっぱいに入れる。」
 響「直樹を真似て、草餅を口に詰め込む。」
 河川敷の草叢で咲いている一輪の母子草、風に優しく揺られている。

○ 駅前
 足早に歩いている人々。
 響「立ったまま、ギターを弾きながら歌っている。」
 目の前に空のクッキー缶が置かれており、硬貨が少し入っている。
 響「通り過ぎてゆく人々、一人ひとりを見つめながら、失う前に、大切なものに気づけるだろう」
 手を繋いで、談笑しながら歩いている両親と幼い女の子。
 響の歌「何度か、何度か、あの本を開いて、答えを探そうとする」
 男性、離れようとする女性の手を握り、引き留める。
 女性、男性の手を振り払い、駅の入り口へ消えていく。

響の歌「何も見つからず、生きる楽しさも、
もぐ意味も、見失う時があるだろう。で
も、気付いてよ。たっさんの物語に、あな
たの名前が刻まれている。誰かにとって、
あなたが、その本を選んだ理由なのよ」
信号を待っている女性、肩を震わせな
がら泣いている。
響の歌「その友人、彼女の背中をさする。
響の歌「大きいリュックを背負っている中学生
の少女、ゆっくり歩いていく。
小柄の母親らしき女性、少女のリュッ
クを持ち上げ、受け取るうとする。
少女、微笑んで、リュックを自分で背
負い直す。
響の歌「穏やかに話しながら、歩いていく二人。
なる。痛みも、喜びも、分ける。その一部に
て、夢見て、愛して。そうして、生まれた
記憶が、今日も、私たちを、絶望から救っ
てくれるだろう」
突然、コインがクッキー缶に落ちる金
属音が鳴る。
響、クッキー缶を見ると、500円玉
が一枚、新しく増えている。
響、周囲を見回すが、立ち止まってい
る人が誰もいない。
？「ヘクシヨン！」
響、空を見上げる。
その表情は、どこか清々しい。
(了)

【参考文献】

・映画『Shall we ダンス？』（1996）

・嵐

<https://starto.jp/s/p/artist/10>

（閲覧日：2025年8月2日）

・パートナーシップ制度について

<https://globe.asahi.com/article/15624285>

（閲覧日：2025年8月3日）

・母子草について

<https://www.543life.com/content/shun/post20230304.html?rsltid=AfmB0oqlrZWQZrHgcbP9zIGrXp5dBrYvxGnGPSoqaFBICfcg0yCb65S>

（閲覧日：2025年8月2日）